

コロナ禍がもたらしたメリット・デメリット

総合リハビリテーション学会

学会長 岩 井 信 彦

新型コロナウイルス感染症の発生から丸2年を迎えようとしています。世界は未だこのナノサイズの物質の脅威に晒されています。わが国では第5波収束の兆しが見え、感染者数も以前と比べればかなり少なくなりました。しかし、この冬にかけ第6波の到来を予測する声もあります。

現時点ではコロナ禍は収まりつつありますが、研究活動を展開するにはまだまだ課題が山積みされています。私が指導する大学院生もコロナ禍の影響でデータ収集が思うように進まず研究活動に遅れが生じています。コロナ禍によるデメリットをあげればきりがありません。しかし、メリットもあるはずです。先進国の中では遅れ気味であったわが国のデジタル化がコロナ禍をきっかけに大きく進んでいくものと思われます。また、遠隔会議やテレワークの浸透が、我々が移動に要していた時間を節約できることを学びました。何事にも表裏があります。皆さんはコロナ禍で重苦しい思いを抱いているかと思いますが、デメリットの陰に潜むメリットを見つけ出し、それらを拾い上げ研究活動に活かし、今まで以上の研究成果をあげていくことを望みます。

本学会は総合リハビリテーション学部の学生、大学院生、卒業生、教員で構成され、主な活動は以下の3点です。①学術集会、講演会、研修会等の開催 ②会誌「神戸学院総合リハビリテーション研究」の発行 ③学生会員への活動・研究助成。

総合リハビリテーション学部の学生、大学院生、OB、OG、教員がリハビリテーションをキーワードに相集い、研究活動を行うことは、総合リハビリテーション学部のディプロマポリシーにも通じるものであり、本学会の活動意義は決して小さいものではありません。

本学会の活動の大きな柱「学術集会」ですが、昨年度はオンラインで何とか開催することができました。しかし、今年度は対面形式にて9号館メモリアルホールで開催します。またこの模様をZoomでリアルタイム配信をします。いわゆるハイブリッド開催です。史上初めての試みです。今後の学術集会開催方式の範ともなる可能性があります。より多くの会員に聴講して頂き、活発な議論が展開されることを期待します。

2021年12月吉日